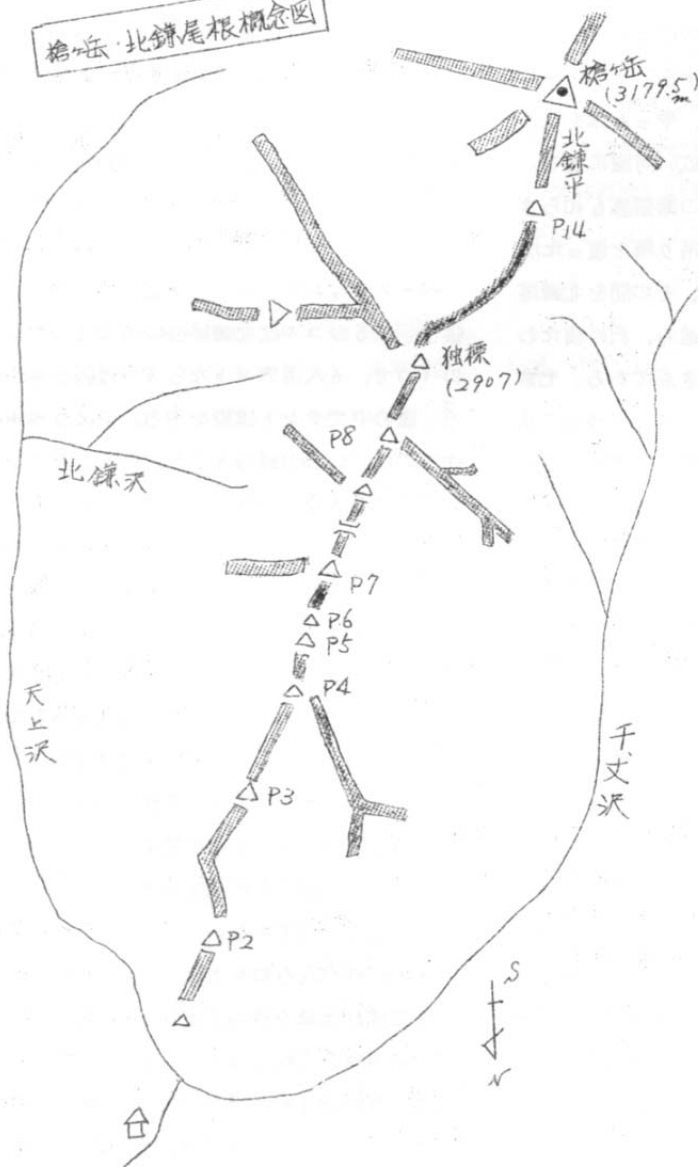


昭和41年

冬期槍岳，北鎌合宿

山岳技術研究会

槍岳・北鎌尾根概念図



1. 七倉より北鎌 四・五の科尔へ

勝野 優

マイクロバスで七倉まで入り、清々しい空気を胸一杯吸って、高瀬川に沿った軌道を歩き始める。太陽は我々を歓迎するかの如く散々と照り輝き、快い微風が我々の頬を撫でる。軌道の上は雪もまばらで、軽やかな足取りは濁小屋を過ぎ第五発電所に進む。軌道は切れ真白な雪の上に立つ。上級生の話によると昨年はかなりラッセルを強いられたそうだが、今年は雪の量が少くさほどの苦勞もなく湯俣に着く。高瀬川はここで湯俣川と水俣川に二分される。地面が露出している露天風呂の近くに設営。地面の上もここ当分の別れである。昨夜は車中あまり眠られなかった為、シュラフに入り

るとすぐ眠入ってしまう。

早朝、薄明るい中を出発。先行者の足跡をたどり、第1吊り橋を渡り水俣川に沿って進む。途中少しいやな場所に出合う。右はツララ状の壁の上はかぶり気味、左は5m程落ちている。上級生は何なく通り過ぎ、自分も後に続く。身を屈めて一步一步慎重に進む。タッシュにつけたわかんがツララに引掛かり、一瞬ひやっとする。ザックを摩らせながら前進、その間約5m、やっと体を起こし大きく溜息を吐く。やがて幅広い河原に出る。一面の雪を眺めていると、先程の緊張感も和らぎ眠気を誘われる。水俣川は第2吊り橋を渡った所で更に千丈沢と天丈沢に分かれ、その間を北鎌尾根が走っている。天上沢沿いに進み、沢に横たわっている大きな木を渡ると取付き点である。七倉からここまでは殆ど高低がない。ここが最後の水場で、ここから上に登ると雪を溶かして作らなければならない。誰もが敬遠したがる仕事だ。テントの外では、雪が音もなく深々と降っていた。

3日目、どんより曇った空の下でテントを撤収、いよいよ登りである。傾斜が急であるうえ、やわらかい雪は膝までもぐり、最初のピッチが最も苦しい。樹々の間を切り抜けながら除々に高度をかせいで行く。しばらく登ると梯子の掛っている70度程の急斜面に出合う。危険な箇所は、前日上級生がザイルをフィックスしていて、そのザイルを握り1人ずつ登って行く。1歩1歩踏みならされた足場を確認しながら進み、この悪場を登りきった所で一服する。傾斜はやや緩くなるが登りは依然と続く。苦しい登りを終え、樹林帯の中にテントを設営、荷上げしていた1斗缶を掘り出す。上級生は、明日の行動がスムーズに運ぶように、ルート工作に出る。夜風が出てきて、樹々は騒がしく揺れ動いていた。

風弱く薄暗く曇っている中を出発。この様な天

気では気持ちまで重苦しくなる。樹々はだんだん小さくなり岩が姿を現わしてくる。三峰への登りは緊張する所である。急斜面を20m程登り左へ10mトラバースする。一寸の油断も許されない。三峰に登ると視界は開け、アイゼンが快く効く。雪化粧した岩を登り、岩まじりの緩線を慎重にたどって4・5のコルに着く。

かつの・まさる（文学部学生）

2北鎌尾根 4.5のコルからC1へ

太田 英雄

ベースキャンプを最初の予定通り4.5のコルへ張る。4.5のコルは北鎌尾根の中では最も広い所の1つで、6人用テントなら3つは張る事が出来る。風の中でテント建設をやる。やはりベースを作るのは、いつの場合もうれしいものだ。1年生も雪中での夕食の仕度は初めてにもかかわらず、仲々スムーズに進んでいる。これから何日間かこうして同じ事を繰り返すわけである。テントの外から雪のかたまり（ブロック）を取り、コッフェルで溶かし水にする。水の補給はこれしか無いのだ。水の中で生活していると言ってもさしつかえ無いであろう。もしテントの中で水でもこぼして手袋を濡らしたとしよう。それは合宿が終るまで濡く事は無い。だがその手袋をテントの外へ持って行けば、一瞬の内に水は氷り、あたかもかわいた様に見えるのである。

テントの中に入るのも大仕事である。自分の家の中まで濡れた傘を持ち込ま無い様に、テントの中には絶対雪を入れてはならない。まずキスリングについた雪を丁寧にタワシでこすり取る。それからヤッケ、オーバースボン、最後にオーバースューズの底の雪をけずり取って中へ入る事が出来る。冬山ではテントの中でも靴ははいたままである。

防寒の意味からも又、冬山が何時も非常事態であるからだ。積雪量も生活と大に関係がある。一夜の内にテントの天井まで、あるいは雪洞の入口が雪でつまってしまう事だってめずらしくは無い。テントの囲りにはブロックを塀の様に作るわけであるが、それも風向を考えねば逆効果になる事もある。であるからテントの位置、方向は生活の上の重要なポイントになるわけである。次の日は晴の天候にめぐまれた。さあ¹の建設だ。冬山の朝は晴れていればこれほど素晴らしいものは無い。太陽がまだ雪の中にもぐり込んでいる内は星はにぶく、昨夜の空をおおいつくすような光は皆、地上に降ってしまったのだろう。

その時、目を突き差す様な太陽の光、地上如何にまぶしいと言ってもこの比では無い。非常に強烈な光線である。太陽が出ると朝の時間は急に進む。アイゼンを靴の底にくくりつけゴーグルを首につける。出発する前の不安も一歩出ると共に消えてしまう。行動中の服装を見よう。スポーツシャツとヤッケだけである。如何に吹雪の際でも上はかわらない。朝、ぬぐのを面倒くさがってセーターでも着ていると顔から汗が吹き出してしまふ。太陽が背中をあたためてくれる。春の一番暖かい日でもまだ寒いであろう。しかし少しでも雲にかくれるとあたり一面、もとの冬にもどってしまう。歩いている時は皆あまりしゃべりたがらない。『言葉少なにただ歩む』と言う歌の文句を実際にやろうと言うキザのあらわれか。北鎌沢コルは雪でうまっていた。スコップに1m程掘り下げてなるべく平にする。そしてこの秋すでに荷上げしている食料を掘りにかかす。いつもの事だが取り出すのは一苦労だ。利尻岳で、3mも掘ってやっと出したことがある。また夜が来た。シュラフにもぐり込む。冬山の夜は静かだ。きつと雪が音を吸い取ってしまうんだろう。さむい、ものすごくさむい。

風が出て来た。明日はクリスマスだというのに。心配した通り、クリスマスは荒れていた。雪がテントをたたく。1日中テントの中から動かない。時々テントの囲りをスコップを持ってラッセルに行く。風が、吸う空気を持って行ってしまふ呼吸が苦しい。目も開けておれないし、鼻からは鼻水が出てくる。10分もすると鼻からあごにかけてツララが出来る。時間をつぶすものなら何でもやって見る。ただし寝る事は出来ない。昼食がアツと言う間にすむとそれから長い長い時間だ。次の日、又停滞だ。いやになる。

そしていよいよアタックを出すのである。

おおた・ひでお(商学部学生)

3. 槍ヶ岳・北鎌尾根アタック

藤 原 聡

12月29日 晴 -11℃

A・¹建設

¹発、9時30分。北鎌沢コル¹から天狗の腰掛まで、サポートの太田、山内にラッセルをしてもらう。天狗の腰掛で2人と別れて、いよいよA・¹予定地、独標を見出す。独標基部よりピークまで、前日のフィックスザイルを用いて約30分のピッチであった。独標のピーク着12時40分。ここは千丈側にルートを取った。夕方ごろからかなり風が強くなってきたようであったが、我々はテントを大きな岩の陰に張っていたのであまり感じなかった。

12月30日。快晴、風強し。

アタック

4時40分起床。4時50分のB・¹及び¹との交信を終えた後朝食。そして出発準備をする。7時テントの入口を締めて出発。

これから登っていく雪稜がだんだんと朝日で黄

金色に染まっていく。独標の下りは千丈側に行く、太陽の陰になりなんとなく暗い感じた。千丈側に
出た途端に強い風を受ける。雪は少なくよくしま
っている。アイゼンの雪にきしむあの独特の音が
快よい。独標を下りきってから一度B・Cとの交
信を試みたが、やはり不可能であった。我々はル
ートのほとんどをリッジ伝いにとっていったが、
雪も適当についていてそれほど困難もなく、8時
35分北鎌平に着く。

ここにおいてのトランシーバー交信は成功した。
あと1時間ほどでピークに立てることを連絡する。
このあたりから風はますますその勢いをましてき
た。そしてすぐ目の前には部分的に雪をつけた黒
黒とした岩の槍のピークが、迫ってきた。それは
まるで所々に雪をまとった巨大な岩壁であった。
ここからみると、どこにルートを取って行けばよ
いのか迷うほど、それは反抗的である。小休止の
後最後の登りにかかる。

大槍基部からはところどころに残置ハーケンが
あったので、それをピレイピンとしてつるべ式に
登っていく。雪の状態もよく、別にザイルを使う
必要もないように思われたのであったが、念のた
めに用いた。最初はリッジ通しに行き、そして右
へ大きく回りこんでいった。

登るにしたがって風はますます強くなり、又上
部の方は丁度日陰になっているので雪は氷のよう
になっており、強風のため寒気はきびしく、手の

指の感覚もなくなってきて苦勞する。

9時58分槍ヶ岳ピーク着。

槍沢に雪煙の舞っているのを見る。すぐにA・
Cサポート隊と交信する。

10時15分下山にかかる。寒くて長居はでき
ない。ザイルを使うとかえっておそくなり、又ザ
イルが風にあおられて岩にからみつき、落石をひ
きおこす危険があったので、ザイルなしで下りる
ことにする。

途中少し登りのルートはずしてしまっただが、
別に問題もなく北鎌平に降り立つ。

ここでやっとわずかにある緊張から解放され
た。

そこからは登りと同じルートを、忠実にたど
て行く。風は依然強く吹いており、そのため風に
ふきとばされてくる雪が、まるで砂粒を顔にふき
つきられるようで、まともに目もあけていられな
かった。

途中P¹⁴をすぎた所ぐらいで、風のあたらない
天井沢側にはいって昼食をとり、1時28分サポ
ート隊の待っている独標上A・Cに帰りついた。
ふり返って槍のピークに目をやると、自分がつい
さっきあの頂上に立っていたんだということが何
か信じられないような気がした。それは、あまり
にも無表情に遠くに聳えていたからだ。

ふじわら・さとし(工学部学生)

§§§§§§§§

§§§§§§§§